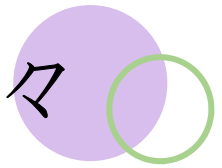


令和2年度 前期常設展

磐城平藩内藤家の人々



はじめに

譜代大名内藤家は、元和8年(1622年)に入封して以降、6代にわたり江戸時代前半期の磐城平藩を治めました。内藤家の治世は、小川江筋の開さくという大規模工事が行われたほか、俳諧を中心とした文化活動も盛んでした。

今回の常設展では、磐城平藩主を中心とした内藤家の人物や、それぞれに関わる出来事などを紹介し、その背景となる、内藤家が入封する以前のいわきの状況や、磐城平に入封する以前の内藤家についても触れています。

この展示が、いわき地域の歴史の興味を深めていただく端緒となれば幸いです。

内藤家入封前のいわき

岩城家の支配は、数百年間続きましたが、岩城貞隆(能化丸・佐竹家からの養嗣子)の関ヶ原の戦いへの不参が理由で、慶長7(1602)年、領地を没収されました。

その後、元和2年(1616年)に信濃国(現長野県)川中島の内1万石を与えられ、同9年(1623年)には出羽国(現秋田県)亀田2万石へ転封となりました。

慶長7年(1602年)、岩城家にかわり鳥居忠政が下総国(現千葉県)矢作4万石から加増され、10万石で入封しました。これは、関ヶ原の戦いの前哨戦、伏見城での戦いで討死した、忠政の父・鳥居元忠の武勲によるものでした。

忠政は、新たに磐城平城を築くと同時に城下町を再編成し、また、領内の検地を行うなど領国支配体制を整備し、元和8年(1622年)、出羽国(現山形県)山形20万石へ転封となりました。



「岩城平城絵図」 三猿文庫所蔵

本絵図には、製作時期等を示す年号は記されていませんが、元禄9年(1696年)の幕府の命による国絵図・郷帳・城絵図の撰上の時の絵図である可能性が高いとされています。

内藤家について

内藤家は、古くからの徳川家の家臣(譜代大名)で、家格は帝鑑間詰、墓所は神奈川県鎌倉市の光明寺です。

天正 18 年(1590 年)の徳川家康の関東入封に伴って、上総国(現千葉県)佐貫 2 万石を与えられました。

慶長 5 年(1600 年)、関ヶ原の戦いの前哨戦、伏見城での戦いで、内藤家長とその子元長は、初代磐城平藩主・鳥居忠政の父元忠らと共に討ち死にし、その功績により、家長の遺領を継いだ内藤政長は 3 万石に加増されました。

慶長 19 年(1614 年)の大坂冬の陣では安房国(現千葉県)の守護、元和元年(1615 年)の大坂夏の陣では江戸城留守居役を勤め、それによって 1 万石、のち 5 千石を加増され合計 4 万 5 千石となり、元和 8 年(1622 年)には、7 万石で磐城平に転封することとなりました。

内藤政長

永禄 11 年(1568 年)、内藤家長の子として生まれました。

元和 8 年(1622 年)、政長は磐城平城を築城した鳥居忠政にかわり、上総国(現千葉県)佐貫 4 万 5 千石から磐城平 7 万石(磐城郡・磐前(崎)郡・菊田郡・檜葉郡の内)に加増され入封しました。その子内藤忠興も所領を移され、2 万石に加増されています。

鳥居家時代から行われていた検地や、防風・防潮林の植林に力を注ぎ、現在も政長の法名から名付けられた「道山林」が残っています。

寛永 11 年(1634 年)10 月に死去しました。

内藤忠興

文禄元年(1592 年)2 月、内藤政長の子として生まれました。初めは忠長といました。

元和 8 年(1622 年)、父政長の磐城平への転封と同時に、忠興も所領を移され菊多郡内に 2 万石を与えられました。

寛永 11 年(1634 年)、忠興は政長の遺領を継いで磐城平藩主となり、それまで忠興の所領だった 2 万石は、弟内藤政晴に与えられて泉藩が成立しました。

藩主となった忠興は、寛永 12 年(1635 年)から 21 年(1644 年)の約 10 年間にわたり、領内の総検地を行いました。特に集中的に行われたのが寛永 15 年(1638 年・寅年)であることから、この時期の総検地は「寛永寅の縄」と呼ばれています。

そして、小川江の開さくや「家中法度」「諸代官郷中取扱之定」「郷中御壁書」の 3 種からなる「壁書」という平藩初の成文法制定を行い、明暦 3 年(1657 年)には、家臣の地方知行制を廃して禄米制へ切り替えるなど、藩体制を確立しました。

承応 3 年(1654 年)と万治 2 年(1659 年)の 2 度、大坂城代に就任し、また、地誌『磐城風土記』の編さんを葛山為篤に命じ、寛文 10 年(1670 年)に成っています。

同年 12 月、忠興は嫡子内藤義概に家督を譲って隠居し、延宝 2 年(1674 年)10 月に死去しました。

○小川江筋

小川江筋は、小川町関場地内で夏井川より取水され、四倉町戸田で仁井田川と合流する、全長約 30km におよぶ用水路で、沢村勘兵衛が開さくを行ったと知られています。

小川江筋の開さく以前の磐城平藩領内は水の便が悪く、領内を流れる夏井川は田畑よりも低いところを流れていたため、流域はその恩恵を受けることができませんでした。

そこで、寛永 10 年(1633 年)に下小川村(現小川町)に江筋のための堰が築かれ、寛永 18 年(1641 年)からは、郡奉行に就任した沢村勘兵衛が開さくに携わりました。

慶安 2 年(1649 年)、沢村は郡奉行を罷免され、後任に今村知商が就任します。小川江筋の完成は寛文年間(1661~1672 年)であったようです。

これにより、磐城平藩の石高は約 2 万石の増収となりました。



「小川江筋絵図」 金賀家所蔵

澤村神社官司金賀家に伝わる絵図です。全長約 30 km の小川江筋を約 15m の長さに描いています。

沢村 勘兵衛

沢村勘兵衛勝為(直勝とも記す)は、沢村仲の子として生まれ、兄の沢村甚五左衛門重勝と共に、上総国(現千葉県)佐貫を治めていた内藤政長に仕官しました。

内藤家の磐城平転封後の勘兵衛は、寛永 18 年(1641 年)に郡奉行に就任し、小川江筋の開さくに尽力しました。

勘兵衛の最期については諸説ありますが、土地の不正や許可なく寺を建て寄付を行ったとされたことで、慶安 2 年(1649 年)に郡奉行を罷免され、明暦元年(1655 年)7 月 14 日には切腹を命ぜられ死去したと伝わっています。

農民たちが勘兵衛の霊をなぐさめるために踊ったのが「ぢゃんがら念仏踊り」の始まりともいわれ、明治 9 年(1876 年)には、平下神谷に勘兵衛をまつる澤村神社が創建されています。

今村 知商

河内国(現大阪府)に生まれた算学者で、通称は仁兵衛といひます。寛永 16 年(1639 年)に『堅亥録』、同 17 年に『因帰算歌』、同 19 年に『日月会合算法』という算学書を著しました。

その後、内藤忠興の家臣となり、慶安 2 年(1649 年)に郡奉行を罷免された沢村勘兵衛の後任に就きました。今村は、郡奉行として小川江筋の開さくのほかに、廻米の便をはかるための船路の開さく・川幅の拡張や農政改革などを行いました。

寛文 8 年(1668 年)に死去したと伝わっています。

○『磐城風土記』

『磐城風土記』は、いわき地域における最初の地誌で、葛山為篤が編さんし、寛文 10 年(1670 年)に成りました。

内容は、封疆・風俗・郡村・山川海石・道路関・土産・神社・仏寺・墳墓・人物・古蹟といった項目に分けられており、当時の統計・交通・物産などを伝えています。

この項目設定が『会津風土記』とほぼ同様であることなどから、編さんに際して『会津風土記』を参考にしたものと考えられています。

葛山 為篤

『磐城風土記』の編者で、内藤家に仕え平曲松(現平字八幡小路)に住み、板坂以得(坂以得)とも称したと伝わっています。

国学にも通じており、内藤義概の命による『続類題和歌集』(全 300 卷)や、義概の歌集『左京大夫義泰家集』(義泰は義概のこと)の編さんを行いました。

内藤義概（風虎）

元和 5 年(1619 年)、内藤忠興の嫡子として生まれました。初めは頼長といい、晩年は義泰と名のり、風虎・風鈴軒など多数の俳号があります。

寛文 10 年(1670 年)、父忠興の隠居に伴い 52 歳で藩主となり、弟遠山政亮に新田分 1 万石を分知したことで、『超高速！参勤交代』で知られる湯長谷藩が成立しました。

早くから和歌・俳諧に親しみ、『左京大夫義泰家集』や『桜川』など多くの和歌集・句集があります。また、家訓の制定や箏曲の八橋検校の支援、寺社の復興や文化財の保護にも尽力しました。

領地支配は、松賀族之助をとりたてて一切を委ねたため、新参の松賀家と古くからの家臣たちとの対立が生じ、「小姓騒動」などが起き、藩は混乱しました。その後、松賀家は 3 代にわたり藩政を専断しました。

義概は、貞享 2 年(1685 年) 9 月に死去しました。

○小姓騒動

延宝 8 年(1680 年)2 月 2 日、山本金之丞・篠崎友之助・山口岡之助・井家九八郎・大胡勝之進の 5 人の小姓が、小姓頭山井八右衛門と対立し暇を願い出ました。

一時は和談となりましたが、4 月 24 日、山本金之丞・山口岡之助・大胡勝之進の 3 人が山井八右衛門の屋敷へ押入り、山井夫妻を殺害し逃亡しました。井家九八郎は、何らかの理由で松賀族之助預かりとなっていた篠崎友之助を奪還するため、松賀の屋敷に向かいました。

5 人は順に捕らえられ、8 月 25 日に切腹となりました。

○家訓の制定

延宝 5 年(1677 年)3 月、内藤義概は家訓を制定し、後嗣である内藤義英に与えました。

その内容は、徳川家への忠誠、父母への孝行、家臣の用い方、生活態度にいたるまで、藩主としての心得を示したものです。

○八橋検校

八橋検校は、諸説ありますが、慶長 19 年(1614 年)に陸奥国磐城に生まれたと伝わっています。幼いころに失明し、三味線や箏曲をおさめ、三味線の調弦をもとに箏柱を動かす調律法などを考え、「八橋十三組」や《六段の調》などの器楽曲を作って箏曲の基礎を作りました。

また、内藤家から扶持を受けており、八橋流の創立にあたって、内藤義概は不足の章歌を補ったといわれています。

その後、貞享 2 年(1685 年)6 月に死去したといわれています。

昭和 39 年(1964 年)7 月 12 日には、八橋検校生誕 350 年を記念して、平小太郎町に「八橋検校顕彰碑」が建立されました。



「八橋検校顕彰碑」 平小太郎町
昭和 39 年(1964 年)7 月 12 日建立

内藤義英（露沾）

明暦元年(1655年)5月、内藤義概の次子として生まれました。義英ののちに政栄と名のり、露沾と号しました。

兄内藤義邦が早世し後嗣となりましたが、父義概と確執が生じて、天和2年(1682年)には家督相続を辞退したため、弟内藤義孝が後嗣となりました。

それ以後の義英は、藩政から遠ざかり、早くから親しんでいた俳諧の道に進みました。松尾芭蕉と親交をもち援助を行い、芭蕉の『おくのほそ道』旅立ちの際にも餞別の句を送っています。

元禄8年(1695年)、義英が江戸から磐城平の高月の邸(現・磐城高等学校校地)に移り住むと、多くの俳人が磐城を訪れました。

享保18年(1733年)9月に磐城で死去しました。

内藤義孝

寛文9年(1669年)、内藤義概の子として生まれ、兄内藤義英が家督相続を辞退したことで、貞享2年(1685年)に藩主となりました。

温泉神社(いわき市常磐湯本町)本殿の造営や、「国魂文書」(県指定重要文化財)の散逸を防ぐため1巻に装幀するなどの功績があります。

正徳2年(1712年)12月に死去しました。

内藤義稠

元禄12年(1699年)9月、内藤義孝の次子として生まれました。兄内藤義覚が早世したため後嗣となり、正徳2年(1712年)12月に藩主となりましたが、享保3年(1718年)5月に死去しました。

義稠には嗣子がなかったため、伯父内藤義英の子内藤政樹が藩主となりました。

内藤政樹

宝永3年(1706年)10月、内藤義英の子として生まれました。従兄に当たる内藤義稠が亡くなり、嗣子がなかったため、享保3年(1718年)10月に藩主となりました。

藩主となった政樹は、和算家の久留島義太を享保15年(1730年)に、松永良弼を同17年(1732年)に召し抱え、指南を受けました。久留島は磐城平、松永は江戸詰めとなり、参勤交代で政樹が江戸在府時は松永が、磐城平帰国時は久留島が指南しました。

元文3年(1738年)9月、年貢・諸役減免を求める全藩一揆が起きました。多年にわたる天災による減収と様々な出費が、藩財政を圧迫し、それに伴う過酷な増税が農民を疲弊させたことが原因といわれています。

延享4年(1747年)、日向国(現宮崎県)延岡7万石に転封となり、125年にわたる内藤家の支配が終わりを迎えました。

○内藤政樹に召し抱えられた和算家

久留島 義太

備中国(現岡山県)松山に生まれ、江戸に出て独学で算学を学び、塾を開いていましたが、享保15年(1730年)、内藤政樹に拾人扶持で召し抱えられ磐城平に来ました。

久留島は酒を好み、自分では1冊の著書も著しませんでした。学友の松永良弼や久留島の弟子達によって残され、『久氏弧背草』など約20点が現在に伝わっています。

延享4年(1747年)、内藤家の日向国(現宮崎県)延岡への転封に伴って久留島も同地へ移り、宝暦4年(1754年)に引退し江戸に戻り、同7年(1757年)に死去しました。

松永 良弼

筑後国(現福岡県)久留米藩の浪人だった松永は、江戸に出て荒木村英に師事し算学を学びました。享保17年(1732年)、内藤政樹に六両三人扶持で召し抱えられ、江戸詰めとなりました。

『方円算経』など、生涯で約40点の著作を残し、延享元年(1744年)に江戸で死去しました。

○元文三年百姓一揆

元文3年(1738年)9月に起きた、年貢・諸役減免の要求をする一揆です。参加者は8万人といわれています。

多年にわたる天災による減収、江戸屋敷や平城下の火災による出費、寺社造営費の負担、幕府から命ぜられた普請による負担の増加は、次第に藩の財政を圧迫していきました。そのため、家臣や領民からの借り上げや徴税強化が行なわれ、それらが積重なり、藩体制を揺るがす全藩一揆となりました。

元文3年9月18日早朝、農民たちは平城下へ押し入り、町役所・牢屋・藩の役人宅などを打ちこわし、年貢諸帳面を焼却し、翌日、御番頭赤井喜兵衛との直接交渉により、20ヶ条の要求書を藩側に差し出しました。

10月5日、赤井は、要求書に署名した28名を招集し、「病氣差合」を除いた11名が出席しました。そこで赤井は、全面的に農民側の要求を受入れることを申渡しましたが、出席した11名に「御尋の儀」があるとして揚屋(未決囚を入れる牢の一種)に入れることとし、再び帰村することは許しませんでした。そのため、要求の全面受入れについて、一般農民に伝えられることはありませんでした。後日、一般農民に出された回答は、要求のほとんどが拒否されたものでした。

その後、一揆指導者の逮捕や藩内全域の取調べが開始され、翌4年8月、逮捕された指導者の処刑が行われました。



「元文義民の碑」 平鎌田

昭和25年(1950年)5月5日建立

内藤家文書

内藤家文書は、内藤家の藩政文書を中心とした資料群で、明治大学博物館が所蔵しています。昭和38年(1963年)に内藤家から明治大学へ移管され、その後、市場に出ていた内藤家旧蔵資料を購入し、内藤家に残されていた資料の寄贈を複数回受けるなどし、その数は約5万点にのぼります。これは、譜代藩の文書としては最大級のもので、

文書の年代は、磐城平藩2代藩主・内藤忠興の頃の藩政文書が最も古いもので、藩政文書のうち約3分の1が磐城平藩に関するものです。

明治大学では内藤家文書の目録作成が進められ、昭和38年に移管された文書の目録を収録した『内藤家文書目録』(1965)の刊行以降、『内藤家文書増補・追加目録』として複数の目録が刊行されています。

また、いわき総合図書館では、内藤家文書のうち磐城平藩関係文書をマイクロフィルムで公開しています。これは、平成19年(2007年)のいわき市立図書館の移転時に、「図書館を大きくする会」より寄贈を受けたものです。

内藤家文書の内容紹介

老中奉書

将軍の意をうけて老中が出す文書をいいます。

内藤忠興の時代から慶応3年(1867年)までのものが残っています。

御内書

将軍の発給する、書状形式に近い内々の文書ですが、将軍の地位から公的効力を持ったものです。

内藤忠興の時代から日向国延岡藩7代・内藤政義の時代までのものが残っています。

万覚書

藩の政治の移り変わりなどを日々書き留めた覚書です。

天候・行事・様々な出来事やそれに対する措置・藩の出した法令・藩内からの諸々の願い出などを日ごとに記録されています。

延宝2年(1674年)から明治3年(1870年)までのものが残っています。

内藤忠興書状

国元の家老に対する忠興公からの農業政策などの指示・江戸の米価の推移・全国の政局の情報など、非常に具体的な内容です。

約160通が残っています。

参考文献

『いわき市史 第2巻 近世』	いわき市史編さん委員会 // 編	1975	K/210.1-1/イ
『譜代藩の研究』	明治大学内藤家文書研究会 // 編	1972	K/210.5-1/フ
『内藤侯平藩史料 巻1～6』	平市教育委員会 //	1975	K/210.5-1/ナ
『新しいいわきの歴史』	いわき地域学会出版部編集委員会 // 編	1992	K/210.1-1/ア
『藩史大事典 第1巻 北海道・東北編』	木村礎 他 // 編	2015	K/210.5-0/ハ-1
『駿台史学 第23号』	駿台史学会 // 編	1968	K/210.5-1/ス
『明治大学刑事博物館資料 第18集』	明治大学刑事博物館 // 編	2003	K/322/メ-18
『いわきの人物誌 上』	いわき地域学会 // 編	1992	K/281/イ
『『磐城風土記』成立年代考』 （『福島史学研究 通巻第31号』）	菊池康雄 著 福島県史学会 // 編	1978	K/210.0-0/フ
『小川江』	平市教育委員会 // 編	1963	K/210.0-1/オ
『延宝五年磐城平藩主「内藤義概家訓」』 （『明治大学刑事博物館年報 15』）	神崎彰利 著 明治大学刑事博物館 // 編	1984	DK/069/メ
『平藩小姓騒動誌』	志賀伝吉 // 著	1980	K/210.5-1/シ
『八橋検校』	八橋検校没後三百年祭実行委員会 // 編	1984	K/768/ヤ
『福島の和算』	福島県和算研究保存会 // 編	1970	K/419/フ
『松永良弼』	平山諦 他 // 編	1987	K/419/マ
『史料東北諸藩百姓一揆の研究』	庄司吉之助 // 著	1969	K/210.5-0/シ
『元文磐城百姓一揆』	桜井一平 // 著	1959	K/210.5-1/サ
『藩領と江戸藩邸』	日比佳代子 // 編	2014	K/210.5-1/ハ
『内藤家文書目録 第1部～第3部』	明治大学博物館 // 発行	2007～2009	K/029/ナ-1

令和2年(2020年)7月10日 発行

■編集・発行 いわき市立いわき総合図書館



令和元年度 前期常設展「磐城平藩内藤家の人々」

■会期 令和2年(2020年)6月30日(火)～10月18日(日)

■会場 いわき総合図書館 5階 地域資料展示コーナー